

子宮頸がん予防ワクチンを接種される方へ

子宮頸がんについて

- ① 子宮頸がんは、子宮の入り口付近にできる“がん”で、20～30代での発症が増加しています。発症すると、手術で子宮を摘出しなければならなかったり、時には命を失う可能性もあります。日本では年間約1万1千人が発症し、約2千9百人が死亡しているといわれています。
- ② 発がん性の「ヒトパピローマウイルス」に感染することが主な原因です。
- ③ 子宮頸がんは通常、数年から十数年かけて徐々に進行しますが、初期段階では自覚症状がほとんどないことから、症状が現れたときには、“がん”が相当進行していることがあります。

ヒトパピローマウイルス(HPV)とは

HPVは、皮膚や粘膜に感染するウイルスで、100種類以上の型がありますが、このうちおよそ15種類が子宮頸がんから検出され、「高リスク型HPV」と呼ばれています。その他、良性のイボである尖圭コンジローマの原因となる「低リスク型HPV」があります。

HPVに感染すること自体は、決して特別なことではなく、性交渉の経験のある女性なら誰でも感染する可能性があります。

ワクチンの効果と副反応について

ワクチンは、「サーバリックス」と「ガーダシル」の2種類があります。下記を参考にして、どちらか一方のワクチンを選んでください。(決める際に迷ったときは医師等に相談してください。)

※間隔を守って接種してください。

	サーバリックス (組換え沈降2価ヒトパピローマウイルス様粒子ワクチン)	ガーダシル (組換え沈降4価ヒトパピローマウイルス様粒子ワクチン)
ワクチンの効果	○高リスク型HPVのうち、16型・18型に起因する子宮頸がんおよびその前駆病変の予防	○高リスク型HPVのうち、16型・18型に起因する子宮頸がんおよびその前駆病変の予防 ○低リスク型HPVのうち、6型・11型に起因する尖圭コンジローマ(いぼ)の予防
接種方法	上腕三角筋(肩に近い腕)に筋肉注射	上腕三角筋(肩に近い腕)または大腿四頭筋(太もも)に筋肉注射
接種回数	3回	3回
接種間隔	○1回目を起点として、2回目は1か月後、3回目は6か月後に接種する。 【例】4月に1回目を接種した場合 4月 5月 10月 0 1 6 ※やむを得ず接種間隔の変更が必要な場合 1回目→1か月以上→1回目から5か月以上、かつ 2回目から2か月半以上	○1回目を起点として、2回目は2か月後、3回目は6か月後に接種する。 【例】4月に1回目を接種した場合 4月 6月 10月 0 2 6 ※やむを得ず接種間隔の変更が必要な場合 1回目→1か月以上→2回目から3か月以上
主な副反応	通常起こる軽いもの	○発熱 ○注射部位の反応(痛み、赤み、しこり、腫れなど) ○失神(ワクチン接種後に注射による痛みや心因性の反応等による失神があらわれることがあります。失神による転倒を避けるため、接種後30分程度は体重を預けることができる背もたれのあるソファーに座るなどして様子を見るようにしてください。)
	まれに起こる重いもの	○アナフィラキシー様症状(ショック症状、じんましん、呼吸困難など) ○ギラン・バレー症候群 ○血小板減少性紫斑病(紫斑、鼻出血、口腔粘膜の出血等) ○急性散在性脳脊髄炎(ADEM)

予防接種による健康被害救済制度について

- 定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障がでるような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、予防接種法に基づく補償を受けることができます。
- 健康被害の程度等に応じて、医療費、医療手当、障害児養育年金、障害年金、死亡一時金、葬祭料の区分があり、法律で定められた金額が支給されます。死亡一時金および葬祭料以外は、治療が終了する期間または障害が治癒する期間まで支給されます。
- ただし、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因（予防接種をする前あるいは後に紛れ込んだ感染症あるいは別の原因等）によるものなのかの因果関係を、予防接種・感染症医療・法律等、各分野の専門家からなる国の審査会にて審議し、予防接種によるものと認定された場合に補償を受けることができます。

※給付申請の必要が生じた場合には、診察した医師または子ども未来部母子保健課（Tel 32-1533）にご相談ください。

接種に当たっての注意事項

- ① 受ける前日は入浴（またはシャワー）をし、体を清潔にしてください。
- ② 接種後、30分間は会場で体の様子を観察してください。急な副反応はこの間に起こることがあります。
- ③ 接種当日は、激しい運動は避けてください。
- ④ 接種後1時間以上経過し、普段と変わりがなければ入浴は差し支えありません。

予防接種の実施においては、体調の良い日に行うことが原則です。お子様の健康状態が良好でない場合には、かかりつけ医等に相談のうえ、接種するか否かを決めてください。

◆お子様が以下の状態の場合には、予防接種を受けることができません。

- ① 明らかに発熱（通常37.5℃以上をいいます。）がある場合
- ② 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな場合
- ③ 受けるべき予防接種の接種液の成分によってアナフィラキシーを起こしたことがある場合
- ④ 明らかに免疫機能に異常のある疾患を有する場合および免疫抑制をきたす治療を受けている場合
- ⑤ その他、医師が不適当な状態と判断した場合

なお、現在妊娠している方の場合、接種することに注意が必要な方ですので、かかりつけ医とよくご相談ください。

◆お子様が以下の状態の場合には、接種について前もってかかりつけ医等とよく相談してください。

- ① 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患および発育障害等の基礎疾患のある場合
- ② 以前に予防接種を受けた時、2日以内に発熱や発疹など、アレルギーが疑われる症状が現れた場合
- ③ 今までにけいれん（ひきつけ）を起こしたことがある場合
- ④ 過去に免疫不全と診断されている場合、および近親者に先天性免疫不全症の方がいる場合
- ⑤ 子宮頸がん予防ワクチンの接種液成分に対して、アレルギーが現れるおそれのある場合

その他、ご不明な点は、下記までお問い合わせください。

函館市 子ども未来部 母子保健課 電話 32-1533